

濱灣、仰見月光、作歌一首

珠洲能宇美爾、安佐比良伎之底、許藝久禮婆、奈我波麻能宇良爾、都奇底理爾家里。

右件詞者、依春出學一巡行諸郡、當時所屬目作之、大伴宿禰家持。

上記の歌とその詞書の中に氣多大神宮之乎路・波久比能海・能登郡・熊來村・能登の島山・鳳至郡・饒石河・珠洲能宇美・太沼郡・長濱の十二地名を包含してゐる。故に是等の地名を基礎として、家持の巡遊した経路を考へることが出来る。

(二)越登賀三州志の説―富田景周はその著越登賀三州志に於いて、家持は曩に越中新川郡の延槻川を渡り、志乎路を経て初めて能登に入り、氣多神社に赴せんが爲羽咋の海邊を進み、更に轉じて今の鹿島郡七尾附近と思はれる能登郡香島津から舟を漕ぎて熊來村に航し、陸行して鳳至郡饒石河を越え、珠洲郡に入つた後、半島の西岸外浦に沿うて南航し、太沼郡に還り、長濱浦に泊して國府に歸館したとしてゐる。著者はこの太沼郡を、契沖の萬葉集代匠記に基づいて、羽咋郡大海郷の誤寫なりと斷じ、長濱灣は鹿島郡府中以東、太田・矢田などの海岸で、和名抄にいふ長濱郷であると解してゐる。

(三)越中萬葉遺事の説―森田平次はその著越中萬葉遺事に別の説を爲してゐる。曰く、家持は越中を巡行した後、一旦射水郡の國府に入り、水見から志雄越を過ぎて羽咋郡に出で、氣多神宮に參拜し、外浦の海濱神代・福浦などを經て内浦に出で、香島津から發船して能登島の抱擁する灣内を航し、熊來村即ち今の中島に著し、再び陸路外浦に出で、鳳至郡饒

石河を涉り、鈴の御崎附近に至り、御崎又は鹽津から海に航して、外浦を羽咋郡に漕ぎ歸り、長濱灣に碇泊して大海郷に着し、志雄の山路を越えて射水の國府に歸つたとしてゐる。この論に於いては、香島津を七尾の浦續きにて、寧ろそれよりも北方に求めんとし、長濱灣を羽咋郡富來の中濱であるとするものである。

(四)前二説の批判―前二説は略類似してゐるが、家持巡國の目的が出學の事務を監査するにあるのだから、各郡家を過ぎる必要があるであらうが、その点に考慮を拂つてゐないのみならず、歸程の水路を外浦としたのは大きな錯誤かと思はれる。

(五)第三説―是に於いて第三説が必要であるが、その考察はかうである。家持は志雄越から羽咋郡に入ると、先づ羽咋の海即ち現今よりは非常に大きかつた呂知瀨の南岸に沿うて羽咋に至りその郡家を訪ひ、更に北に進んで氣多神宮に詣で、神宮から呂知瀨の北岸に沿うて七尾附近の香島津に達した。能登郡の郡家はこの線上にあつた。香島津から船を漕ぎて熊來即ち今の中島に上陸し、半島を横斷して富來に出で、劍地に入る所を饒石川を渡り、黒島から門前往來又は海岸に近い路線の一を取つて輪島附近に至つた。その中段附近に郡家があつたと思はれるからである。それから海岸に沿うて時國に至り、鈴屋から東折して正院にあつたであらう珠洲の郡家に至つたと見える。正院から歸路海に浮んで、能登島の外側を通過し、地理學者のいふ鹿島半島の東側長濱浦で月光を仰いだのである。鹿島半島の西側を長濱浦とするものもあるが、

吾人は家持が故らに必要のない七尾灣内を迂航したとは思はぬからその説を取らぬ。長濱浦からは越中射水郡の阿努郷に着き、布勢の湖口に舟を棄て、布師の國府に歸つたのであらう。萬葉集に大沼郡と書いたのは、太沼郷の誤で、それは阿努郷と同じとする説に従ふべきである。

オホトリキ 大鳥居 羽咋郡富木院に屬する部落。能登名跡志大福寺の條に、『昔は七堂伽藍の寺、大寶年中泰澄大師開基の大地にて、富木院内は不殘社領なりしといへり。其時鳥居ありし所を、今も大鳥居村といふ。』とある。

オホナ 大南 羽咋郡町(部落名)のうちの小字。
オホナガサキ 大長崎 鳳至郡皆月の北方にある岬。
オホナガノ 大長野 能美郡德橋郷に屬する部落。
オホナダ 大灘 羽咋郡德田の内の小字。
オホナダレザン 大額山 能美郡風嵐部落から西方の山。高さ八三三米。山體侏羅系。
オホナンヂダケ 大汝岳 白山記に御前岳を叙したる次に、『北並峙高峯。其頂住大明神。號高祖太男知。阿彌陀如來垂迹也。建立一間一面寶殿。安置五尺金銅像。其前立一丈錫杖。』(依末代傳人語)『緊一尺八寸鐔口。』(願主越前國香呂一校願主)とある。この峰は白山三峰の一つで、大己貴岳と名付けたのを、越南地にも大汝にも作り、又尾添側の先達は内陣といひ、牛首側の先達は奥院と稱する。神祠は、寛政中の調書に『奥院越南知社見付七尺梁九尺六寸』とあり、今もその通

りで、白山奥宮の攝社大己貴神社とせられてゐる。大汝岳は御前岳や劍ヶ峰よりも後に外輪山壁を破つて噴出した角閃安山岩の熔岩である。高さ二六八〇米。今地圖に大汝峰と記する。
オホニシ 大西 羽咋郡富木院に屬する部落。
オホニシカゲツ 大西荷月 鹿島郡高島の人で、寛政十二年に生まれた。俳諧を卓次に學び、嘉永二年立几して正花堂と號した。明治二十年旬集拾かへり集を編み、二十三年九十三歳を以て歿。

オホニシキンエモン 大西金右衛門 元織田信長に仕へて瀧澤氏を稱したが、信長の死後前田利家に仕へ、天正十二年には末森城に在つて武功があり、後大坂の役に使番を勤め、祿千石に至つたが、子なくして斷絶した。
オホニシヤマ 大西山 河北郡津幡の北方沃野中に突起する丘陵である。遠く金澤と河北潟とを望み、近く津幡の人家を眼下に見る景勝の地である。
オホニシヤマ 大西山 鳳至郡西山の内の小字。

オホヌカ 大額 石川郡富樫庄の内に屬する部落。
オホヌカゴウ 大額郷 本願寺派諸寺系圖に、元應二年石川郡大糠郷に大額坊が草創せられたことを記してある。大糠郷は大額郷で、古くは額七ヶと稱して、大額・額谷・額乙丸・額新保・額三十疋・額助丸・額栗林があつたといふから、それをさしたのであらう。後世では富樫庄の内である。但し額三十疋は三十疋となり、額助丸と額栗林は廢絶した。